

はじめに

これは四季の風に誘われて、いつかどこかにあつたできごとをはじめてしまう、男と女の〈物語〉です。  
春の風では恋人たち。

夏の風では夫婦。

秋の風では、同棲中の男と女。

そして、冬の風では、まだ誰でもない男と女。

観客が、自分たちの〈日常〉を重ね合わせ、抗い、もうひとつの見方や感じ方を持ち帰ってくればいい、  
と思っっています。

アダムとイブの昔から、女はただ一人の女であり、男はただ一人の男で、二人はまだ、本当に出会ったこと  
がなく、他者のふりをしているだけなのかも知れません。

## 春風

女がいる。

女は、かがんですわり、体がすっぽりと隠れる、半透明な布をかぶっている。  
風が吹いている。

風は布を揺らせ、その中の女も揺らせている。  
春風である。

女 生臭い風 春の風 春風

艶めいて風 春の風 春風

息の匂いの風 春の風 春風

春風が裾から入ると

肌と布の間で風がぬくめられて、

乳と乳の間を通って 風が

胸から 立ちのぼると

少しばかり 汗の匂い

ほんのわずか 肉の匂い

酔いごこち とろりの 酒を飲むと  
酒の匂い いかかわしくて  
男の浅い香に よく似て  
男の腑が もぞり 動きまます  
足の裏が こそばゆいです

女、ふくみ笑いし、

女 嘘ばかり 揺れるのは あそこ

あそこ

あそこ

どの位 嘘ついたかしら

山程 海程 嘘の数

重ねて来た 女暦の

身の上話の 嘘の数

女、ゆらゆらと揺れ、その揺れる速度で闇となる。

同時に、暗闇の中で一本のマッチが擦られ、蝋燭に火がともされる。

一人の男がつけたのだ。

その炎のうしろに蝶々の形を作った手を置くと、壁に影絵がうつる。

男 蝋燭に火をつけて、しばらく待っていた。一分、二分、三分、……すると寄って来た。蝶々だ。ほおら、来た。思わず知らず、火のそばに来る。そうだな。こいつらには火というもんが、まるでわかっちゃいな  
いんだ。じりじりと片方の羽が焼けて、それでも寄ってくるんだ。くるのはいいが、そいつは火だよ。気  
をつける、そいつは、火だよ。

蝋燭を吹き消すと、闇。

そしていきなり明かりが点くと、巨大な砂時計を前に置き、男と女が並んで座っている。

一つの砂時計は、砂が落ちきりそうになり、もう一つの砂時計は砂が落ちはじめたばかりだ。

男と女は、動作と表情だけの「会話」をはじめめる。

女 (甘える)

男 (甘えに照れる)

女 (ますます甘える)

男 (ますます照れる)

二人は、昨夜のベッドの中の出来事を思い出しているようだ。  
と、不意に女が黙り込み、怒りを押し殺して、

女 (すねる)

男 (不機嫌に言い訳する)

女 (男を責める)

男 (ぶすつとする)

女 (怒りをふくらませる)

男 (怒る)

女は男の外泊を問い詰め、男は、その執拗さを怒っているようだ。  
それからまた、女が黙り込んで、泣きながら、

女 (訴えかける)

男 (頷く)

女 (泣きじゃくり、身もだえ、のたうちまわる)

男 (慰める)

女は、母親の死に遭遇して哀しみ、男は何とかそれを慰めてやろうとしている。

(台詞、または、台詞にかわる動作言語で)

女 『母さんは、苦労ばかりして来たわ。でも笑いを失くさなかったわ。私、そんな母さんが好きだったわ。』

男、愛情をこめて女の肩を抱き、台詞、または台詞にかわる動作言語で、やさしく、

男 『わかってるさ。僕等の味方をしてくれたのは彼女だけだった。僕は自分の母親以上に、彼女を愛していたよ。』

二人、しっかり抱き合い、さめざめと泣くが、不意に笑顔となり、

女 (指を一本出す)

男 (指を一本出す)

女、深呼吸して、

女 (男の指に自分の指をからめる)

男、あくびをして、

男  
(指を引く)

女  
(サンドイッチを差し出すような動作で) ワン?

男  
(頷いて受け取り) ワン。(一口、食べて) ワン!

女  
(コップを差し出す動作で) ワン?

男  
(受け取り) ワン。

二人は、ピクニックに来て、昼食をとっているようだ。「食べる?」「あゝ」「うまいよ!」「飲む?」「ありがとう」などの会話が交わされているのである。

二人、ニコニコと笑いながら、

女  
ワン。

男  
ワン。

男、ごろんと横になり、眠ってしまふ。

女  
風だわ。春の風が吹いている。……いたたまれい……、そう思うんです。春は家出の季節。だれかが私を誘うんです。今の場所から出ておいでよ、と何かを私を誘惑する。花の匂いの吐息が耳から鼻から眼から入って、体中がむずがゆくなってくるんです。そんな気持ちになったことありませんか? 私何も不満はないんです。何もかも普通の等身大で世の中は、私の背丈にぴったりと合って、居心地がいいの  
にね。

女、憑かれたようにモノローグを続ける。

女  
でも、私、出て行きたい。私が私の中から出て行きたがっているんです。どこへ? 多分、ふるさと、と名づけられる見知らぬ場所へ。私、春の風が吹くと、そう思うんです。春風のせいなんです。

女、立ち上がると、どこへともなく帰ってゆく。

女  
風が吹くと、春風が吹くと、帰りたいのです。

女が去ると、男は、むっくりと体を起こし、「畜生、風だ。春の風だ」と呟く。  
それから立ち上がり、

男

汽車は、俺の家とは反対側の道路の畑の中を、いつも走っていた。風だ！　いつもとても早く走っていた。春風だ！　オフクロと親父が喧嘩をしている時には、風！　オフクロと親父は、いつも金のこと、春風！　喧嘩ばかりしていたけれど、風が吹く、そんな時、俺はいつも、畑に降りて行き、風だ！　線路の上を、どこまでも歩いて行った。ヒューーツ！　オフクロと親父が喧嘩している時には、ヒューヒュー！　しばらく黙って聞いていてから、口と鼻をおさえて、息をこもらせて、二人の喧嘩が聞こえないようにして、それから道路を横切って、畑へ出て、犬がオシッコしているのを見て、つるつるしている坂をすべり降りて、ヒューヒューヒューヒュー！　それから反対側の大きい丘の上へ登って、風だ！　どんどん歩いて行って、線路に出て、また、どんどん、どんどん歩いて行って、それからどこまでも歩いて行った。ヒューヒュー風が吹いて、僕は泣き出したけれど、誰も側にないんで、すぐ泣くのをやめた。誰も側にいない時、僕はいつも、すぐ泣くのをやめた。誰かが傍にいと、いつまでも風のように泣いて、今に、逃げ出して死んでやるって、おどかした。僕の泣き声は、風だった。こんなふうに泣いて、泣きやまなかつたんだ。ヒューヒューヒューヒュー……。

男、風のように泣いて泣きやまない。

それをかき消すようにして、暗転。